

山下史人氏からのコメントに対する応答

居永正宏¹

山下氏（以下敬称略）からの質問は三点にまとめられているので、順に答えていきたい。

第一の質問は、産みの哲学の方法論を問うためには、まず「何の経験が男性にとっての「産み」の経験とされるのかについての全体的な素描」が必要ではないか、というものである²。山下も了解しているように、拙論では、夫婦共同型出産を始めとして、女性による身体の生理作用としての出産と「何らかの形で関わっている」経験が、男性にとっての産みの経験であると述べた。その上で、この「何らかの形で関わる」ということの意味が何であり、その範囲がどこまでなのか、というのが質問の意図だと思われる。まず範囲についてはさしあたり、女性パートナーの分娩の瞬間だけではなく、少なくとも出産を可能にする生殖関係に入った時点から、それによって誕生した子供を育てて成人させるまでの間の、自分と女性パートナーと子供との三者関係をめぐる経験が男性にとっての産みの経験である、と答えられる。ただ、それらのみが男性にとっての産みの経験であるとは言えない。例えば、結果的に子どもが産まれなかったとしてもそこに産みの経験がなかったとは言いがたいし、子供が成人した瞬間に産みの経験が終焉するわけでもない。さらには養子を迎える場合にも、その子がどこかで産まれた存在である以上、それは産みの営みの一部だといえるだろう。また逆に、「自身—パートナー—子ども」の三者関係の中に客観的事実として置かれるということと、産みの経験をするということは必ずしも一致しない。それは例えば、身近な人が亡くなるという事実が降り掛かってくると、その事実に関わる弔いと喪の経験が同じではないのと類比的である。つまり、男にとっての産みの経験は、女性の出産と何らかの形で関わる経験なのだが、女性の出産と関わる経験が即ち男にとっての産みの経験だというわけではない。ここまで考えてくると、「男性にとっての産みの経験」とは何かという質問に十分に答えるには、単に女性の出産に「何らかの形で関わる」ということ具体例を挙げるのではなく、そもそもある経験がいかにして産みの経験となるのかを問わなければならないということが明らかになってくる。この点に関しては

¹ 居永正宏（いながまさひろ）日本学術振興会特別研究員 PD（関西大学）、大阪府立大学客員研究員

² 山下史人、「居永正宏『産み』を哲学するとはどういうことか」へのコメント、本号、29頁。

確かに拙論ではほとんど論じられていない。筆者は以前の論文³で、産みとは「他者」をこの世界にもたらず営みであり、その他者とは「私の死後に生きていく他者」とであると論じた。この主張を踏まえれば、ある経験が産みの経験となるのは、それが私の死後に生きていく他者に関わるという点においてであり、先の三者関係を始めとする経験がこのような経験として立ち現れるとき、それが男性にとっての産みの経験だと言える⁴。ただこれは依然として抽象的なレベルでの議論であり、そもそも「私の死後に生きていく他者」との関わりとは何なのか、また逆にそのような関わりを全て「産み」としてまとめてしまってもいいのかという点など、答えるべき疑問は多い。それに関しては現時点では、筆者の今後の課題と答える他ない。

この質問に関してもう一点、山下はコメントの脚注 2⁵で、拙論が男女の性的差異を強調する以上、題名は『産み』を哲学するとはどういうことか」ではなく「男性にとって『産み』を哲学するとはどういうことか」と改めるべきではないかと指摘しており、筆者も同意する。この点に関連して、筆者には、産みに限らず、中絶、生殖医療、性犯罪など性的差異と切り離すことのできないあらゆる事柄について、性的／ジェンダー的ポジショナリティを等閑視した言説は不十分であるように思える。この点は次の質問にも関わっている。

山下の第二の質問は、拙論の脚注 14⁶について、男女それぞれの「産み」が媒介なしに直接関わるとはどういうことか、更に、そもそも男女それぞれにとって自らの産みの経験とは常に媒介されたものではないのか、というものである。後者について山下は、産みだけではなく、あらゆる経験が媒介されたものであるというアイデアの一例として産みの経験を捉えているようである。先にこの後者について述べたい。

まず確認しておきたいが、当該脚注は、男女の差異を無視し（たつもりになっ）て本質的に性的／ジェンダー的差異を含む事柄を論じることの否定を主旨としたもので、全ての経験は媒介なしには立ち現れ得ないという認識論的立場を否定しようとしたものではない。この二つの次元の区別について、山下の記述には若干の混乱があるように思われる。

³ 居永正宏（2014）、「『産み』の哲学に向けて（1）先行研究レビューと基本的な論点の素描」、『現代生命哲学研究』、第3号、88-108。

⁴ そこから言えば、女性にとっても、単に生理的な妊娠・分娩を経験することと、ここでいう「産み」の経験との間にはズレがあることになり、拙論のように素朴に分娩・妊娠過程と「産み」を接続することはできなくなる。ただそれを強調すると、逆に女性と「産み」を素朴に切り離す言説となりかねないので、論じ方も含めて今後慎重に考察したい。

⁵ 山下、前掲、28頁。

⁶ 居永正宏、「『産み』を哲学するとはどういうことか——哲学と経験」、本号、20頁。

例えば中絶の是非を論じるときに、議論の前提として、そもそもある経験が「中絶」として認識されるためには、確かに言語の媒介がなければその経験が中絶の経験として立ち現れることはない。筆者はそれを否定するものではないし、それは山下の言うような「媒介による経験の搾取」⁷ではなく、そもそも経験とはそういう構造によって経験となるに過ぎないのであって、それを「搾取」と呼ぶのはミスリーディングだと思われる。もちろん、ある経験を「中絶」とカテゴライズする事によって、その「中絶」カテゴリーに収まりきらない側面の把握を阻害することはあるだろう（もちろんその別の側面が把握されるときは別の何らかの媒介によることに変わりはない）。しかしそれは、そもそも経験は言語による媒介によって経験となるという構造に起因するわけではなく、それを前提とした上で特定の「中絶」概念に起因する。このような意味で、産みの経験も媒介されたものでしかありえないという山下の指摘は一種の哲学的な次元の議論としてはその通りではあるが、筆者が当該脚注で用いた「媒介」は、（男によって）中性的に規定された（つमoriの）特定の「産み」概念を女性の産み経験の把握に媒介として用いることは控えるべきだという意味であり、山下の指摘と当該脚注の主旨との間にはズレがある。ただ、用語法として「媒介」が適切であったかという点については今後留意したい。

この点に関連して、第一の質問への回答の際に述べた「産みとは私の死後に生きていくものをこの世界にもたらず営みである」という筆者の主張についても、男性哲学者が一種の中性的な産み概念を提示している一例なのではないか、と言われるかもしれない。もちろんそのような仕方で議論することも可能ではあるが、筆者としては、そのような批判が当たらないよう、あくまで自身が肉体的に出産することのない男性哲学者が提示する一つの産み概念として今後論じていきたい。

さて、山下の第二の質問のはじめにあった、「男女それぞれの産みが媒介なしに直接関わるとはどういうことか」という問いに戻る。山下は「男女間での経験の搾取は、それが男によるものであれ女によるものであれ、性的差異を順守する限り、避けられる……」⁸と述べているが、このような素朴な「性的差異の順守」によって搾取が避けられるとは筆者には思われない。山下は、筆者が「男性にとっての産みの経験は女性にとっての産みの経験に関係している限りで、産みを経験している」ということから、「この条件を守る以上

⁷ 山下、前掲書、32 頁。

⁸ 同上、同頁。

は男性による女性的経験の搾取は起こりえない」⁹と言う。しかし逆に、女性の産み経験に依存しているからこそ、男性による産み把握が女性の搾取を産む可能性があるのではないか。例えば、人間には男女に関係なく個人としての死が訪れる。この可死性（mortality）に苦悩する男性哲学者が必死に死の哲学的考察を積み重ねても、それが女性の搾取に直接つながるわけではない。一方で産みについては、男性にとってそれが女性に依存している営みであるという点（もちろん完全に対称的ではないが女性も男性に依存しているので正確には相互依存だが）において、男性哲学者による産みの考察は女性による産みを必然的に含んでしまう。そのとき最低限必要なのは、その考察があくまで男性の産みの考察であるということ、それが男女両方の産みを統合的に把握するような中性的（だが実は男性バイアスのかかった）産みを提示するものではないということに留意することである。そのような意味での「中性的な産み」に媒介されることなく、男女の産みがそれぞれ当事者によって探求され、しかしお互い他方がなければ産みは成り立たないのだから、関係していくということ、筆者が「男女それぞれの産みが媒介なしに直接関わる」と述べたのはそのような意味である。もちろん、ここで述べたような素朴な男女の区別を超えて、そもそも産みの条件としての「性的差異」とは何かという問いにも取り組まなければならない。

山下の最後の質問は、拙論では産みの経験へと男性の経験を広げることで産みの哲学が可能になり、それが哲学の進歩であるかのように言われているが、それは本当に進歩なのか。そもそも哲学は「進歩」するものなのか、「進歩」によって見失われる問題があるのではないか、というものである。

この問題は大き過ぎるのでここで十分な答えはできないが、筆者はある意味では確かに哲学は「進歩」すると考えている。ただその「進歩」は、天動説から地動説への進歩のように、後者の登場が前者を誤りとして退けるようなものではなく、ユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への進歩のように、後者が前者を含み込んだ上で可能性を拡張するようなものである。それが、拙論の中で、「経験の可能性を拓いていくこと」が哲学の一つの方向だと述べた意味である。例えば、デカルトの「思惟する自我」からベルクソンの「持続」、メルロ＝ポンティの「生きられる身体」という流れは筆者にはそのように捉えられる。しかし筆者は、すべての「哲学」と呼ばれる営みがこのような意味で進歩するとか、それによって失われる問題はありえないといった強い主張をしたいわけではない。た

⁹ 同上、同頁。

だ少なくとも、拙論で提示した「産み」の哲学という営みは、これまで哲学的身体論に欠けていた「産み」という領域に足を踏み入れるという意味で、哲学の一つの進歩ではないだろうか。